

# 技術情報発信で 研究開発のスピードアップを

— Technical Information Disclosure for  
Speed-up in R&D Process —

常務取締役  
研究開発部門管掌  
磯崎 理

Osamu  
Isozaki



いつも『塗料の研究』を御愛読頂き、誠に有難うございます。小誌を通じて当社における新技術、新製品開発の状況を御理解頂き、また小誌の内容につきまして皆様の御意見やアドバイスを頂戴でき、誠に有難く存じております。

研究開発のあり方はその時代、時代を反映して変貌してまいりました。1960年から1980年代は各企業が立派な中央研究所を設立し、そこで研究開発された技術の特許で保護し、それに基づく新製品を世に出していくという、いわば「シーズ思考」でモノ作りを行ってまいりました。

しかし、1990年代に入ると、顧客から距離があって直接見えにくい研究開発活動は、完成までの時間が掛かり過ぎるし歩留まりが悪い、との反省がなされ、その結果、顧客が困っている問題、或いは欲しがっていることを実現するといった、いわゆる「ニーズ思考」へと移行して来ました。

この変化の表れは知的財産に対する考え方に顕著であります。技術がより高度かつ複雑になり、自社技術だけでは成り立たなくなった現在、オープンにしてしまえば真似される危険性は常にありますが、むしろ公開して得意分野の異なる他社の協力を得ることが重要になってきました。隠して先行者利益を得るより、発信して他社の協力を得よう、そうすることによって収穫を早めよう、という考え方があります。

もちろん知的財産の権利を護ることも必要です。しかし、それと同時に、当社は出来る限りの技術情報を公開し、塗料業界の発展に尽くしたいと考えております。この『塗料の研究』の出版は、その一つの表れであります。

最近、盛んに環境対応の技術開発が行われておりますが、これもビジネスチャンスであると考えるばかりではなく、多くの会社と協力して地球規模での環境保全に尽くすといった崇高な精神こそが請われる時代ではないでしょうか。

本来、塗料は素材を保護して劣化から防ぎ、美しく装うというまさに環境保全製品であります。当社もVOC低減や省エネルギー硬化塗料の開発を行ってまいりました。又、トウモロコシのようなグリーンな原料から塗料を作っていく研究を行い、家電製品用途で実用化いたしました。ただ現時点ではまだまだ問題が残されており、塗料会社にとっては、環境に負荷をかけている部分を出来る限り少なくしていく事が課せられた義務と心得ております。そのために、お客様や素材メーカーと共に、場合によっては同業他社とも協力して対応してまいります。

当社は今後とも広い視野に立って研究開発を進め、お客様の満足度を高めるよう努力していく所存であります。

一層の御指導と御鞭撻をお願い申し上げます。